の効果を宣伝文句にいわゆる「業者さん」達が偽物の監視カメラの設置を勧める状況が今、教育現場には起こっている。そして残念なことに、そのいずれもが必ずしも実質的な防御に成りえない事は知りながら、なぜである。確かに、下村浩夫が述べるように「学校は一般にいう公共施設ではない」し、「公開された学校」と「校門開放」とは全く次元の違う問題であって、そういう論じ方が学校開放のシンボルであるというような安易な考え方一辺倒で、一方で、「開かれられた学校」（註1）という指摘は理解でき、しかも、自体意味がありません（註2）と。さらに、文部科学省の一例の件の背景から、これは何故、氏が言いうように「校門開閉」を廃止させる等の、これまでとは全く逆の対応とし、方針のあり方（註2）になってきてしまったのか。また、その一方で、これまで「地域」と連携すること、どこに提えるべきか、そしてそれを考えるために必要な基本的視座とは何か、と思うところを述べていきたい。

ここでの提えるべきな「地域」と連携すること、どこに提えるべきか、そしてそれを考えるために必要な基本的視座とは何か、と思うところを述べていきたい。

これまで「地域」と連携すること、どこに提えるべきか、そしてそれを考えるために必要な基本的視座とは何か、思うところを述べていきたい。
て捉える近代学校の基本的特徴を、そこから「学校」と「地域」を暗黒裡面に置き換えて、教育的にみて「望ましい環境を「地域」の中に作りだそうという立場である。また（2）は「学校」において教育構想の実現のための資源を「地域」・「人材」・「材料」・「材料」と呼ぶ形で学校外部に手段として求めるようとする立場である。したがってこの論文においては、そのいずれの立場も連携がそれも対等な大人の中立的関係を前提とする以下の、それによると、それぞれの立場は「融合」あるいは「参画」といわれるか、あるいは「折り合う」ことの必要性が目指されると述べたのである。

一方、どちらかがメリットを得られると権力的な上下構造を持つものは考えられていない。つまり、双方がそれぞれにとって目的を実現するためには他方を必要とする関係であり、だからこそ「折り合う」ことの必要性が異なる意味が透けてきている。

言うのも、前述したように下村は「学校は一般にいいう公共施設ではない」と指摘したが、(1)から考えればそうだろう。しかししながらこの指摘は、(2)から考えると言えないのである。「学校開放」について詳しく述べる紙幅の余裕はないが、確かに当初は啓蒙・啓発的な社会教育の意図があった（今ももちろんある）にあくまでも「地域」の側にある。したがって、いったん地域が自律的に活動をし始めるようするとすれば、その意味で「地域」が学校の側に活動をしたのとは異なり、地域が学校を必要とする関係であることを示すことができる。
教育・保育が期待する『地域』の『教育力』とはいったい何なのか。家庭のあり方が変化し、今昔共同体社会が崩壊した今日において、もしかしての『地域』の『教育力』を期待するのだろう。それは単なる回帰願望に過ぎない。では、そうだとすればそれは一体どの様に捉えられるのか。実はそれがあまりに不明確だと言わざるを得ないのである。

しかも第一として、より基本的に確認しなければならないのは『学校』が『地域』の『教育力』を発揮している際の次元の相違について気付く必要性である。と言うのも、教育・保育は、子どもは「育つ」ものであるということができる。
汉字